

2008年北京オリンピックと中国 ～2022年冬季オリンピック招致に向けて～

1 K10C474-8 劉 赫

指導教員 主査 宮内孝知 先生 副査 石井昌幸 先生

【研究の目的・方法】

過去のオリンピック大会の開催地を参考し、IOC のオリンピック大会開催地の選択基準を研究する。地域分布規則がオリンピック開催地の選考基準となるかについて考察を行い、2022年冬季オリンピック招致に向けて立候補している地の中で、開催地になる確率が一番高い都市がどこになるかが研究目的である。それに、他の都市と比べて、優勢と劣勢を考察し、2022年冬季オリンピックの招致に向けて、現在の中国の課題を検討する。

【第1章】

2008年北京オリンピック招致の成功例を参考すると、IOC が開催地を決定する基準は主な8つがある。それらは、社会の安全安定。国民と政府支持、競技水準、競技施設、スポーツ精神、運営経験、経済能力と国家のイメージである。

【第2章】

ノルウェー王国の首都オスロは1952年第6回冬季オリンピックの開催地であり、冬季スポーツ種目が非常に盛んな都市である。しかし、国内にはオリンピックに反対する声もあり、オリンピック開催を賛成する人々が少なく、3つ立候補地の中では当選率が一番低い都市と云えよう。

【第3章】

世界的な大会を開催する経験が3つの都市の中に一番少ないアルマトゥイは今回の招致を88%以上の国民が支持しており、政府もIOC委

員会の選考に対して、全力で準備している。アルマトゥイは2017年の国際冬季ユニバーシアード大会を招致しており、競技施設も基本的に完備している状態で、3つの立候補都市の中では、一番当選率が高い地域であると云えよう。

【第4章】

中国は今回、北京と張家口が共同で開催することを目指し、政府と国民の支持が大きい。それにしても、北京と張家口は冬季スポーツ競技施設の不完備という短所もあり、厳しい環境問題も大問題である。2008年北京オリンピックは世界に中国のスポーツ精神や大会の運営能力や経済などの実力があり、3つの立候補都市の中では、第2位の当選順位であろう。

【結論】

IOC はオリンピック大会の開催地を決定するとき、8つの基準を参考にする上に、総合力で決める。2022年冬季オリンピックはアルマトゥイの当選率が1番高く、環境問題で第2位になる中国と、国民支持率が非常に低いオスロが第3位になると云えよう。

【今後の課題】

2022年冬季オリンピック招致に向かっている中国は、現在3つの課題がある。第1は環境問題、第2は北京市内の交通問題、第3は冬季スポーツ競技への故公文の関心である。